

一、次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 文豪のジキヒツのサイン。
- ② 胃腸は消化キカンです。
- ③ シュクシヤクがあわない地図。
- ④ セツカイで校庭に線を引く。
- ⑤ 細長く布をタつ。

問二 次の各文の——部のカタカナと同じ漢字を用いるものを、それぞれ後のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ① 近頃の若者は会社に対する帰ゾク意識がない。
- ア 彼がこの集落のゾク長だ。
- イ 世ゾクの評判を気にする。
- ウ 何事も継ゾクすることが大切だ。
- エ その物質は金ゾクである。

② 消灯時に点コをとる。

- ア 軽はずみな行動が原因でコ立ってしまった。
- イ 仲間の声にコ応して鳴く。
- ウ 冷静に自コ分析を試みよう。
- エ 日本コ有の植物。

③ 海面温度が上がる現シヨウ。

- ア 父は気シヨウ庁の職員です。
- イ のど自慢大会でシヨウ状をもらった。
- ウ 地球の気温が上シヨウしている。
- エ 舞台で使う衣シヨウです。

④ 来年の春にシヨウ演される舞台。

- ア 今年の夏は異シヨウな暑さだった。
- イ コンサートの会シヨウは大宮にある。
- ウ 私の兄は陸シヨウ競技の選手です。
- エ アメリカとシヨウ約を結ぶ。

⑤ 決定は次の機会まで保リユウします。

ア 川の下リユウに生息する魚です。

イ 来年からイギリスにリユウ学します。

ウ 海岸がリユウ起した地形。

エ 迫力のあるリユウ虎が描かれた屏風。

問三 次の①～⑤について、ア～オの——部の中で他と違う意味・用法のものを、それぞれ選んで記号で答えなさい。

①

ア 先生に指されて立ちあがった。

イ 弟は兄にかわいがられている。

ウ ペニシリンはフレミングによって発見された。

エ 移動中に雨に降られて困った。

オ 昔がしのばれてくる。

②

ア 午後からは雨になりそうだ。

イ 今度は上手くいきそうだ。

ウ 冬になってみんな寒そうだ。

エ 明日は雪でも降りそうだ。

オ 彼は東京の生まれだそうだ。

③

ア 墨を流したような闇が辺りを覆った。

イ 注意されるようなことをしてはいけない。

ウ 彼は魚のような泳ぎをする。

エ 満天の星のような蛍の群れ。

オ 小山のような波が海岸に打ちつけた。

④

ア バスは五分前に出発した。

イ 今から四十年前のことだった。

ウ 確かに彼は来るといつていた。

エ 今年優勝した埼玉のチーム。

オ 海に面した白い家。

⑤

ア よく調べないで怒られても困る。

イ 寝てばかりであまり食べない。

ウ 明日、いっしょに遊ばないか。

エ この映画、少しもおもしろくない。

オ 夏休みにどこにも旅行しない。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自然との連帯について考察しようと試みるとき、私たちを困惑させることのひとつは、自然と人間の関係の複雑さである。たとえば私が一年の半分以上を暮らしていく群馬県の山村、上野村をみると、村人たちはこの二十年ほどの間イノシシ、シカ、サルなどによる畑の被害に悩まされてきた。私の狭い畑でも一年間ほとんど作物が収穫できなかった年もあったほどである。こうなってくるとある種の動物たちは、人間にとって害獣であるといわざるをえなくなってくる。

さらにそれは、人間に対してだけ、でもないのである。というのはシカの増加によって山にはえているササが食べ尽くされるようになってきた。そればかりではなく広葉樹の木も食べられて、山に枯木がひろがり、さらに土から出た草や木の芽も食べられて山の砂漠化がすすみはじめたのである。こうなると雨が降るたびに土壌が流出し、山はいかなる生物も暮らせない場所になっていく。シカの増加によって、自然にとってもシカは害獣だといわざるをえなくなってきたのである。

①ところが別の見方もできる。山村はもともと自然の世界であった。その自然の世界に人間たちが畑をつくり、村をつくって侵入した。だから過疎化や高齢化がすすんだ現在、動物たちが人間という侵略者から自然の世界を奪い返しはじめたとみることもできる。さらにシカによって砂漠のような山がひろがったとしても、エサがなくなればシカも個体数を減らしていくだろう。そしてその頃、土壌が流出し、腐葉土層を失った山では、栄養状態の低い土壌に適した草木がはえてくることになるだろう。こうして何百年かすれば、山は再びその時の状況に合った安定した自然を形成していくことになるだろう。

とすると私たちが自然と連帯するとは、どのような自然に対してなのか。現状の自然を守ることが自然との連帯なのか。それとも変化していく自然と連帯することが重要なのか。しかもここには人間の生存をどう位置づけるのかという課題もある。自然が侵略された大地を人間から奪い返しはじめたと考えることはひとつの視点ではあるが、しかしそのとき人間が暮らすということをどう考えたらよいのか。

自然と人間の歴史をみると、そこでは三つの関係が複雑にからみ合ってきた。ひとつは相互にいかなる害も与えないような共存の関係である。たとえば人間が川から水を汲み、ささやかに山菜や茸、マキノなどを採取したとしても、自然に大きな変動を与えることはなかったように、である。第二に相互に恵みを与える、という関係があった。自然は人間に対してさまざまな恵みを与えるが、逆に人間が溜池や水路、

水田をつくり、一部の山の本を切ったりすることによって暮らしやすい環境が与えられていく生物もいた。人間の活動が生物の多様性を高めるという一面もまたあったのである。

そして第三は対立する関係だった。いうまでもなく人間による大規模な開発は自然を衰弱させる。だが自然もまた洪水や津波、地震や噴火などを起こして人間に禍をもたらししてきた。自然と人間のあいだには、共存、互惠、対立という三つの関係が複雑にからみ合いながら展開してきたのである。

②とすると自然と連帯するとはどうすることなのか。人間にとって都合のよい部分だけと連帯するというのは、自然そのものと連帯したことにはならないだろう。といって、今日の山村の動物被害の問題をもふくめて、「禍」としての自然とも連帯するということが可能なのだろうか。

③実際には人と人との連帯でも同じことが成立するのである。人と人の間にも、お互いにいかなる損傷も与えないような共存関係も成立するし、お互いに恵みを与えるような関係もありうる。

I

対立的な関係もまた成り立つのである。

II

対立的な部分もふくめて

どう連帯するのかを考えなければ、しよせん強者による都合のよい連帯になってしまう。連帯の出発点が他者のかけがえのなさを認め、手を差し伸べあうというところにあるなら、対立する他者のかけがえのなさも認められなければならないだろう。この問題が解決されないかぎり、どんなに「美しい連帯の物語」を語ったとしても、しよせんそれは、ヨーロッパ近代が生み出した理念を他者に押しつける連帯でしかなかったという、近代・現代的な連帯の負の側面を払拭するものではない。

⑤日本についてみるなら、まず第一に気付くことは個人と個人の連帯ではなかったことである。個人の基盤には共有された世界があった。

III

村は個人が集合している場所ではなく、共有された世界に個人が参加している場所である。そしてこの共有された世界を基盤にして、人々とはときに自然と連帯し、ときに他の村という別の共有された世界と連帯してきた。

第二に共有された世界をおしておこなわれる連帯の基本は、折り合いをつけることにあった。正しい理念にもとづいて連帯しようという発想ではなく、さまざまなかたちで現われてくる自然をふくむ他者と、折り合いをつけていくことである。

たとえば自然と人間の間にある共存、互惠、対立という三つの関係は、そのいずれもが自然と人間の関係の本質であり、そのどれかが正しく、どれかが誤っているわけではない。自然と人間が存在するというそれ自身の内にむじゅんが内在しているのである。そうである以上、

むじゅん^⑥とつき合っていくことが連帯である。とするなら自然と人間との間に生じるさまざまな関係と折り合いをつけていくことにしか、共に生きていく道筋は生まれない。そして折り合いをつけようとすると、それは個の力で成し遂げられるものではなかった。共存、互恵の関係ならまだよいが、対立とも折り合いをつけようとすると、どうしても共同の力が必要になってくる。たとえば氾濫する川とも折り合いをつけようとすれば、共同で堤や河畔林^{つみ かわりん}をつくり、遊水池を設け、それでも氾濫したときには水が引いた後の復旧を共同でおこなっていくことが必要だった。共有された世界を介して対応したからこそ、対立する自然とも折り合いをつけることができた。

ここから私たちはいくつかの教訓を学ぶことができる。近代以降生まれてくる連帯は、正しい理念にもとづいておこなわれるものと考えられてきた。だから、たとえば弱者と連帯するのは正しいこと、つまり正義だったのである。そして連帯の出発点は個人の意志にあると考えられてきた。それに対して日本の伝統的な民衆の発想は、正義を求めるのではなくむじゅんを受け入れていくことであり、連帯の出発点は共有された世界の方であった。

これからの社会ではさまざまな連帯が求められていくことになるだろう。労働と労働、あるいは労働者と労働者はどのように連帯していったらよいのか。ここで必要になるのは労働者と労働者の関係のなかにあるむじゅんをどう受け入れていくかであろう。そして、そのむじゅんと折り合いをつけることが可能な自分たちの共有された世界を、どう築いていくかである。

自然と人間の連帯、地域社会での連帯、都市と農山漁村との連帯、高齢者と若者の連帯、健常者と障害者の連帯、異なった文化のもとで暮らす人々との連帯……。それらのあり方をひとつひとつみつけていく積み重ねの先に、私は今日の社会システムとは異なる未来の姿が少しずつみえてくるような気がする。

(内山 節『怯えの時代』による 問題作成のために本文を一部変更・省略したところがあります。)

※1 払拭する……。すっきり取り除くこと。

問一 ――部①「別の見方もできる」とはどういうことですか。適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 動物たちは人間に害をもたらしているように見えるが、一方で彼らは他の生物や自然にも害を与える存在であると見ることもできるということ。
- イ 動物たちが自然を破壊しているように見えるが、一方で破壊された自然は栄養の低い土壌に適した草木を生やして安定すると見ることもできるということ。
- ウ 動物たちが人間や自然に害をもたらしているように見えるが、一方で彼らが人間から自然を取りもどしはじめたと見ることもできるということ。
- エ 動物たちは自然を破壊する行動をとっているように見えるが、一方で人間も自然を破壊しているので動物たちと同じだと見ることもできるということ。

問二 ――部②「自然と連帯するとはどうすることなのか」とありますが、人間が「自然と連帯する」とはどういうことを説明したものとして適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 人間と自然が密接に関係しつつも、お互いにどんな被害も与えないような共存できる関係を築くこと。
- イ 人間にとって都合の良い部分だけでなく、対立する部分も受け入れることで良好な関係をつくること。
- ウ 人間と自然が相互に恵みを与えあうことで、お互いが発展していくことができるように連携すること。
- エ 人間とは対立関係にある自然から、人間に都合の良い部分だけを取り出して利用していくということ。

問三 部③「同じことが成立する」とありますが、それを説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

人との関係は、人との関係と同様に、お互いに、お互いに恵みを与える関係もあり、逆に、

ア

ウ

イ

（二字）

（三字）

（五字）

も与えない関係もあれば、

問四

I	Ⅲ
---	---

に当てはまることばとして、適当なものを、それぞれ次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二回以上選ぶことはできません。

ア たとえば
イ つまり
ウ だから
エ ところが

問五——部④「近代・現代的な連帯の負の側面」とありますが、それを説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

近代のヨーロッパがそうだったように、自分たちが生み出した理念を

ア

(三字) ものとして、

イ

他国に押し付けるような

(十字) 側面。

問六——部⑤「日本についてみるなら」とありますが、筆者は日本の「連帯」のあり方をどうとらえていますか。それを説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

ヨーロッパのように (五字) を出発点として連帯するのではなく、
 (七字) を
 出発点として、 (四字) を受け入れていくという連帯。

問七 ――部⑥「自然と人間との間に生じるさまざまな関係と折り合いをつけていくことにしか、共に生きていく道筋は生まれない」とあります。そう筆者が判断する理由を説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出さない。

自然と人間との間には多様な関係性があるが、そのどれもが自然と人間の関係の (二字) であり、自然と人間が共に (二字) すること自体、つじつまが合っていないから。

問八——部⑦「今日の社会システムとは異なる未来」とありますが、これを作るためにはどのようなことが必要だと筆者は述べていますか。本文中のことはを用いて四十字以内で説明しなさい。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

①「お前、うまいな」

「こんなの、三輪車と同じだもん」

感心して声をかけたら、得意げな答えが返ってきた。その顔を見ているうちに、ひょっとしたらという考えが頭をよぎる。

「そんじゃあ今度は、ペダルこいで走ってみるか」

「うん！」

待ってましたと言わんばかりの声が返ってきた。補助輪なしで走るのが格好いいのだと吹き込んでおいたせいで、北斗なりに待ち構えていたのだろう。

最初はサドルの後ろを持ってやった。両足でペダルをこぎつつハンドルをまっすぐにキープできるか確かめておきたかったのだ。

「ちゃんと押さえててね！」

意気込んだ声を上げ、北斗は思い切りペダルを踏み込んだ。そのせいで走り出すなりバランスが狂い、ハンドルが大きく揺らぐ。

「おっとっと」

僕は慌てて前に出て、北斗と自転車を支えた。北斗も咄嗟に足をつこうとはしていたけれど、きつと僕がいなかったら間に合わずに転んでいたことだろう。

「ちゃんとハンドルを持ってろって。足ばっかり力むから倒れそうになるんだ」

「うん……」

アドバイスの後でもう一度チャレンジしてみたが、やっぱりすぐによろけてしまった。ちょっと言われたくらいでは感覚が掴めないのだろう。

何度か補助付きで試してみた。しかし走れるようにはならず、進歩といえば僕が支える前に自分で足をつけるようになったくらいだ。派手に転ぶ心配が減ったのは良かったが、それでも今すぐ乗りこなすのは無理なようだった。

②「やっぱり、まだお前には早かったみたいだなあ」

優しく論じてやったが、北斗は引き下がらなかった。練習を切り上げられそうな気配を察したのか、振り向きざまに意を決したような声を上げてきた。

「今度は押さえないでよ」

「押さえないでって……お前、今のまま走ったって転んじゃうぞ」

「いいから、見えて」

そう言って、北斗はハンドルに向き直った。思い詰めたような態度に気圧され、僕もその場から動くことができなかった。

ペダルを踏んで走り出した北斗が、少し進んでぐらりとよろけた。僕は思わず駆け寄りかけたが、北斗は足について持ちこたえ、無言で振り返ってくる。

僕が近寄るのを制するような視線だった。立ち止まった父親を満足そうに見やり、再びペダルに足をかける。

よろよろではあるが、今度はさつきより前に進んだ。北斗は息もつかずにもう一度こぎ始める。

こぎ出しては足をつき、だんだん僕から遠ざかっていく。もう転ぶ前に駆け寄ることもできなくなっていた。

さすがにそろそろまづかった。このあたりは道も平らで車の量も少ないけれど、少し進むと急な下り坂なのだ。そこまで進んで何かあったら大怪我しかねない。

「おーい、北斗！」

⑤そろそろ止まれと言おうとした瞬間——不意に、目が眩んだような気がした。

強烈な既視感に息さえ止まった。よろけながら走ろうとしている北斗の後ろ姿に、かつての自分が重なったのだ。

ここだった。あの時の僕が走っていたのも、ちょうど同じ場所だったはずだ。

僕が生まれて初めて自転車に乗れたのも、この道だった。

家の前で走れるようになり、調子に乗って坂へ向かった。だけど下り坂で加速した自転車は止まらなくなって、そのまま坂の下まで突っ込んだのだ。

血の気が引いた。北斗があの時みたいになったらと思うだけで身がすくんだ。

「北斗！」

もう一度名前を呼んだ。北斗は振り向こうともせずに、ペダルを踏み続けている。今すぐ止めなきゃいけない。駆け寄って北斗を捕まえるべきだと思うのに、何故か体は動かない。^⑥胸の奥で膨らむ思いが体じゅうを固まらせた。

かつて坂道に突っ込んだ時、僕が味わったのは恐怖だけではなかった。自転車が加速していく時の快感は今でも覚えているし、身の凍るような恐怖の後にはいくつもの出会いが待っていたのだ。

自転車に乗れたことで見えた景色や、出会えた人々の顔——そんな記憶のかたまりが、頭の中で渦を巻いている。懸命に走ろうとしている北斗の姿に、いくつもの思い出がよみがえってくる。

草太と海まで走った時、海辺でキャンプを張った時、高校でチームロードを走った時。いつだって、僕は自転車に乗っていたのだ。この風ヶ丘から旅立った時だって、やっぱり自転車に乗って走り出した。

朝美と会うために仙台まで走った時も、結婚を決めた後で糸魚川まで走った時も。僕は今の北斗みたいにひたすらペダルをこいで前に進もうとした。だからこそ、なんとかして乗ろうとしている北斗の気持ちがいかによく分かる。

自分から離れていく北斗を止めようと思う一方で、このままだこまでも突っ走ってほしいとも思った。息子が危ない坂道に近づいているというのに、今いる場所から一步も動くことができない。

不意に自転車が揺れなくなった。飛び立った小鳥のように、北斗は自分の力でまっすぐに進み始めた。

「！」

もう言葉も出なかった。目を見開いたまま、走り出した北斗を見つめていた。

時間にすればほんの一瞬のことだったろう。急に重力が戻ってきたように、北斗の自転車が左によろけた。自転車は横倒しになり、北斗は地面に手をついている。

今度こそ駆け寄ろうとした。体は呪縛から解き放たれ、倒れた北斗に向かって足を踏み出せた。

だけど次の瞬間、北斗が顔を上げた。そして僕を振り返り、歓喜の声を上げてきた。

「今、ちょっと乗れた！」

その声に再び立ち尽くした。何故だか急に涙がこみ上げてきた。

「ねえ、ちょっと乗れてたよね？」

「……うん、うん」

大きく頷いてみせた。右手の甲で目を拭い、ようやく笑顔を浮かべることができた。

「よし、今度はこっちに走ってみよう」

「うん！」

北斗は倒れた自転車に手を掛けた。小さな体では自転車を起こすのも大変そうだったが、僕は手伝わずにその姿を見守り続けた。なんとかサドルにまたがった北斗が、再び走り出す。——よろけながら進んでくる息子の姿が、また涙でくもりそうになった。

(竹内 真『自転車少年期—あの風の中へ—』による 問題作成のために本文を一部変更・省略したところがあります。)

※1 吹き込んで……くり返し言い聞かせて教えこんでということ。

※2 咄嗟……非常に短い時間・瞬間。

※3 気圧され……勢いにおされること。

※4 既視感……かつて経験したように感じる事。

※5 草太……「僕」の幼なじみ。

※6 チームロード……自転車競技の一つで四人一組で走る。

※7 朝美……「僕」の妻。

問一 — 部①「お前、うまいな」とありますが、この時の「僕」の様子として適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 得意げな「北斗」に対して不安を抱くが、自転車の素晴らしさを知っている「僕」は繰り返し練習をするように励まそうとして
いる。

イ 予想していたよりもうまく自転車に乗る「北斗」に対し感動し、他の子どもに比べて優れたバランス感覚があることを信じ始
めている。

ウ 自転車に乗ることを簡単だと感じている「北斗」をわざとおだてて、さらに難しい段階に進ませ運転技術を上達させようとして
いる。

エ 手助けをしているものの、うまく自転車に乗る「北斗」に感心し、このままペダルをこげるようになるのではないかと期待して
いる。

問二 — 部②「優しく論じてやった」とありますが、どういうことですか。その内容を説明した次の文の□に当てはまることを、
それぞれ本文中からぬき出し答えなさい。

「北斗」は何度か□□□□(四字)で自転車に乗れるよう試してみたが、一人では□□□□(三字)ようにはならないので、

怪我をする前に「僕」は□□□□(二字)をやめさせようとしたということ。

問三 — 部a「意を決した」・b「身がすくんだ」の本文中での意味として適当なものを、それぞれ後のア～エの中から選んで、記号で
答えなさい。

a 意を決した……………

- | | |
|---|---------|
| ア | 強く心に決めた |
| イ | 意味を決めた |
| ウ | あきらめた |
| エ | 自信を深めた |

b 身がすくんだ……………

- | | |
|---|----------------|
| ア | 体が緊張してふるえた |
| イ | 体がふるえて小さくなった |
| ウ | 体がこわばって動かなくなった |
| エ | 体が恐怖でしびれた |

問四 — 部③「その場から動くことができなかった」とありますが、その理由を説明したものとして適当なものを、次のア～エの中から
選んで、記号で答えなさい。

- ア 中途半端に手助けをすると「北斗」の成長につながらないと思ったから。
イ 何としても自転車に乗ろうとする「北斗」の熱意に負けてしまったから。
ウ 子どもだと思っていた「北斗」に近づくことを止められて、驚いたから。
エ 「北斗」の言い分を無視することはできず、黙っていようと決めたから。

問五 — 部④「無言で振り返ってくる」とありますが、この時の「北斗」の気持ちを本文中のことはを用いて答えなさい。

問六 — 部⑤「不意に、目が眩んだような気がした」とありますが、それはなぜですか。本文中のことはを用いて、三十字以内で答えなさい。

問七 — 部⑥「胸の奥で膨らむ思い」とありますが、その内容を本文中から二十字以内でぬき出し、最初の五字を答えなさい。

問八 — 部⑦「僕は手伝わずにその姿を見守り続けた」とありますが、この時の「僕」の心情として適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 息子を気づかいつつも、頼もしく思い、父としてその成長を喜んでいる。

イ 息子の成長を確信し、自立する姿に父としてややさみしさを抱いている。

ウ 息子はまだ幼いということを認識し、父としてさらに努力しようと思っている。

エ 息子の強気な態度に驚き、父としての教育が甘かったことに心を痛めている。

問九 本文の表現を説明したものととして適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 「北斗」の心情の変化を、倒置法を用いることで分かりやすく表している。

イ 自転車に乗ることの楽しさを、擬人法を多く用いることで表現している。

ウ 心の内を直接書くことで、「僕」の父としての苦悩をありありと描いている。

エ 比喩法を用いることで、「北斗」の成長を効果的に読者に伝えている。

第一回英数特科クラス入試
第一回特別進学クラス入試

座席番号	
受験番号	
氏 名	
評 点	

Endorsements

問 三	
④	①
⑤	②
	③

問 二	
④	①
⑤	②
	③

問 一	
④	①
⑤	②
つ	
	③

10

問七	問六		問五		問四	問三	問一
ア	イ	ア	イ	ア	I	ア	
イ						イ	問二
					II		
					III		
	ウ					ウ	

1000000
 1000000
 1000000

[illegible]

.....